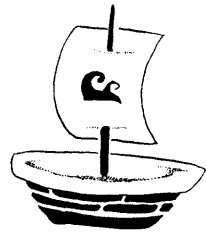


# 風と子どもたちと



前田志津子

十一月のある日、私は子どもたちと一緒に凧揚げをしようと考え、白いビニル製のグニャグニャ凧を子どもたちの目の前に出しました。白地であつたので、子どもたちは、「えをかいて」「ミッキーマウスのえをかいて」と要求しました。そこで私は、大空のなかでもよく分かるように大きく輪郭を描いたのです。色を塗るところは子どもたちに手伝ってもらいました。二本の竹ひごをビニルに取り付け、五〇メートルの長さの凧糸を結び付けて出来上がりです。凧を持って子どもたちと大学のグラウンドに出ました。

始めは、ミッキーマウスの絵を描いたグニャグニャ風を持って走っているだけで、「あがった、あがった、あがったよ」と喜んでいる子どもたちでした。そのうち、ちょうどよい具合の風に乗って風は、上へと揚がっていきます。急いで風糸を解く状況になりました。あつという間に五〇メートルの風糸が足りなくなり、八〇メートルの風糸があつたので繋ぎ足すことにしました。おもしろいように風がぐんぐん空に引き込まれていきます。

八〇メートル繋いだのでは、まだまだ揚がっていきそうです。さらに八〇メートル、私は調子にのって、また八〇メートル繋いだのですから、二九〇メートルということになります。子どもたちは、「二〇〇メートルはあるよね」と互いの顔を見合わせてそう言っています（「二〇〇」という数は子どもにとってはとても大きく感じるようです）。

そこで私は「三〇〇メートルだよ」と力を込めて伝えました。一〇〇が三つもあるということになるので大変になりました。子どもたちは大騒ぎです。風に向かって「どこまでいくーん」と叫んでいます。真剣な顔で「せんせい空がやぶれたらどうする」「このままでは、飛行機にぶつかかるかもしれない」「たいへんだよ」とワクワクするやら心配するやら。もう居ても立っても居られなくなりました。「園長せんせいやんでくる」と園長室に駆けて行きました。

（風は子どもたちの様子を、悠々と大空からみていたにちがいません。）

その間、私は風の行方がよく掴めるように五メートルくらいの間隔で風に向かって風糸

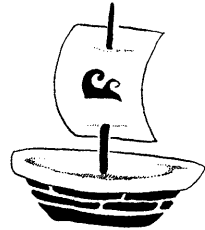
に赤いリボンを結び付けていきました。これでよく分かります。赤いリボンのしるしを追っていけば凧がどこにいるのか。

園長室からグラウンドに戻ってきた子どもたちは、元気ありません。「園長せんせいは、いなかったよ」「どうしようか」とがっかりしている様子です。

そこで、私は凧糸に沿って結び付けた赤いリボンのしるしを指さすと、子どもたちは黙って目で追っています。「あつたあつた」「いたよ」「よかつた」と凧の様子にほっとする子どもたちでした。

約三〇メートルに伸ばした凧糸を代わる代わる持つてみます。「ウーン、ちからがあるよ」「おもたいよ」「手がいたくなる」と凧糸を引く感触を味わうことができました。しかし、いつまでも糸を引いていることはできず、サッカーゴールの柱に凧糸を結んでおくことにしました。

凧をおよがせたまま、部屋に戻ってお弁当を食べることにしました。保育室からは、グラウンドがよくみえます。グラウンドの北側には、高さ三六九メートルの城山があります。凧は城山の西側にみえています。お弁当を食べながらも凧の様子を見守っている子どもたちです。



ところが、いつのまにか風の姿はみえなくなっていることに気がつきます。「風がみえない」「風がいなくなつた」「風がきえた」「風がどこかに行つてしまつた」と、またまた大騒ぎになります。もう食事をしているどころではありません。みんながグラウンドに一目散に出て行きました。

赤いリボンのしるしを伝いながら、風糸を追っていきます。するともうこれ以上は行くことができないというグラウンドの一番西の端のフェンスのところまで行き着きました。子どもたちは、フェンスにしがみついて、風の行方を探しています。「かえつておいでー」「かえつておいでー」と何度も風に向かって叫ぶ声もありました。

自分たちの力ではどうすることもできないと考えたのでしよう。「そうだ、園長せんせい呼んでこよう」と言つて再び園長室に駆けていきました。

今度は園長先生はいらっしゃいました。風を心配している子どもたちの話しを聞き、風の行方を調べてくださいました。フェンスの向こうにみえる池のそばの樹に風糸が引っ掛かっているのが分かります。風はきつとその付近にいますと思われます。園長先生は、「池の近くまで行つてみましょう」と言つて風を探しに行つてくださいました。

その間、子どもたちはグラウンドですつと待つていました。しばらくして園長先生は、戻つてくれました。あの風を連れて。「園長せんせい、かえつてきたよ」「風も一緒にかえつてきたよ」「やつたー、よかつた」と大喜びです。そして子どもたちは無事に

戻ってきた風を抱きしめていました。

この日の風とのかわりをおして、様々なことを感じる事ができました。風への思い、悠々とおよぐ風が突然消えてしまい、必死になって「かえっておいでー」と探す子どもたち、風への愛が窺えます。約三〇〇メートルという距離感、また風糸を引く重み、風の威力も感じたことでしょう。

風揚げの遊びはその後も続いていきます。その子どもたちの姿のなかに、風の状態を心でみる様子が窺えました。朝登園してすぐにグラウンドに出て、その日の風の状況を報告する子どもがいます。日によって風がちがうということができてきました。風が揚がるかどうかわかるようです。「今日の風はだめです」と言うので、「どうして」と聞くと、「台風みたいな風だから、風があげれる」というのです。また「今日の風は、風が揚がりません」、風は弱く、揚力がないと感じているのでしょうか。

風と子どもたちとの遊びのなかで私も楽しませていただきました。

(福岡教育大学教育学部附属幼稚園)